

博報財団 第12回「国際日本研究フェローシップ」成果報告書

I. 研究成果概要

氏名	洪 善英 (ホン ソンヨン)
在住国名	韓国
所属・役職	翰林大学 日本学研究所
招聘回(招聘研究期間)	第12回 (2017年9月1日～ 2018年8月31日)
受入機関	国際日本文化研究センター
招聘研究テーマ	1910年代の劇場形態の韓日比較研究
研究目的	1910年代の韓国と日本の地方劇場の在り方・興行を明らかにする
研究成果概要	
<p>1. どのように研究を進めたか(具体的に)</p> <p>まずは近代劇場の歴史に関する資料を集めて精読し、地方劇場の内部資料を調査し記録を整理する作業を最優先した。具体的には、現存する近代劇場のなか八千代座(1911 熊本県山鹿市)、嘉穂劇場(1922 福岡県飯塚市)、などの現地調査を行い、また寿座(1907 京城)、浪花座(1910 大阪)、明治座(1936 京城)などの多数の劇場関係資料を検討した。地方劇場の興行関連雑誌記事、興行プログラム、画報、脚本、ポスターなどの一次資料の一部を入手することもできた。それぞれの資料館、図書館、劇場の現地調査から得た写真資料や記録などを検討できたのは、滞在研究だからこそなし得た成果といえよう。</p>	
<p>2. 研究によりどのような知見が得られたか(具体的に)</p> <p>演劇は、独自の時間と空間を持つ。またそれは観客のそれぞれの記憶に残り、観客は、自分とは異なる異文化の他者たちと一緒にそこに存在するわけである。演劇を上演する空間は、必ず劇場という場所でのみ起こるものではないことを前提とする。様々な場所で演劇演芸の興行を発見することになるのである。日本の「伝統的な」パフォーマンスを見て同じく共有する記憶や一体感はとても貴重であるといえよう。とくに日本語を共有しない観客、おもに「通俗」の演劇・演芸、すなわち日本人に慣れ親しんでいるものが、意外と異國/植民地/京城などの異境の都市へ移動しやすい点も確認できた。1910年代前後に芝居小屋、活動写真館、寄席などの演劇・演芸にかかわる近代的な空間に注目し、とくに関西地方の劇場から京城(KYONGSENG 現ソウル)などのアジアの都市に拡散する「日本的演劇空間」の意味を捉えたいと思ひ、その舞台に臨んだ日本人劇団は何を演じていたのか、また演者の移動、観客の拡大、日本文化の伝播を明らかにすることができた。</p>	
<p>3. 研究成果(予定を含む)</p> <p>○論文(題目, 掲載誌, 発行者, 掲載月, 内容の概略(200字以内))</p> <p>・「1910年代前後の京城の日本人劇場と韓国初演作」、『日本学報』、2018、12(出版予定)。</p> <p>1900年代に京城にどれほど多くの俳優たちが往来し、演劇活動をしていたのかは定かではない。ただ、当時の資料によると、相当多くの俳優たちが京城、仁川、釜山、木浦などの舞台に立っていたことが推測できる。このように日本人俳優たちが、京城の複数の劇場などで芝居をしていたことを韓国の演劇史、あるいは日本の演劇史のなかに記録すべきであろうか。それは、この研究に取り組むにあたってつねに問いかけた問題提起でもある。本稿では伊東文夫一座と北村生駒一座の演劇のなかで朝鮮初演作の全貌を明らかにした。</p> <p>○口頭発表(題目, イベントの名称, 日・場所, 内容の概略(200字以内))</p> <p>・「京城における日本的演劇空間とローカルの交錯」、日本演劇学会、2018年6月30日、神戸松陰女子学院大学</p> <p>・ローカルな単位における演劇空間もしくは小規模の公演施設が必ずしも中心的な研究対象として取り上げられてこなかったのが、事実である。本研究は、日本の近代演劇・演芸の空間を、大阪、京都だけではなく、京城(現ソウル)に視野を広げ、近代劇場のありようを捉えなおす。</p>	

○その他の活動

・福岡県飯塚市の嘉穂劇場(1922)、熊本県山鹿市の八千代座(1911)、福島市の広瀬座(1887)、岩手県二戸郡の萬代館(1909)、秋田県鹿角郡の康楽館(1910)と花園館(1937)など、明治大正昭和の地方劇場を直接訪問し、内部調査ができた。近代の日本的な劇場空間と韓国における近代劇場のありようがいかなる交流をしていたのか複数の日本の研究者たちとの研究交流ができた。

4. 今後の活動予定

日本演劇学会で口頭発表した日本語論文を学術雑誌に発表することがひとまずの仕事であり、その次は滞在中に整理した劇場興行演目などの基本事項の年譜をまとめて資料集として来年度出版する予定である。それを基盤として今後20世紀韓日の演劇交流史にかんする著作の出版も検討している。